

近現代ドイツ文学における「動物」という問題圏 (1)

——ハイデガー・リルケ・ニーチェ——

木 下 直 也

1. 「動物」という問題圏

フッサールの現象学の「超越論的還元」における認識作用のエポケー（一時的外在化）からハイデガーの存在論に至る流れにおいて、それまでの、対象（物、客体）を主体がいかに把握するかという認識論から、主観、認識の根拠それ自体を俎上に乗せることへの転換、さらには、「存在者」*Seiendes* を認識しようとする人間という「現存在」*Dasein* の「存在」*Sein* 自体の探究、さらには「存在」と「存在者」の「存在論的差異」*ontlogische Differenz* の探究への転換が生じたというのは、哲学史の基本的了解事項であると思われるが、その転換は、とりも直さず、人間主体が認識の同一性の根拠となる統合的中心として世界に内属するのでなく、「現存在」とは、世界をメタ・レヴェルから生成しつつ同時にそこに内属するという循環運動のメカニズムの作動装置それ自体（あるいはそういう構造に帰属する要素であるような主体）であることをも意味していた。デカルトの「コギト」の中心にあるような人間主体はそこにおいて消滅するのであるが、一なおも「主^{スブイェクト}体」ということばを使うならば—「認識主体」は、その意味では（つまり世界に対し外在的でありながら、内属するという意味では）分裂しており、その都度更新される「現存在」と「存在者」のあいだの「関係」の生成の有り様を写すものとして見なさざるを得なくなる。したがって、「物と人間の区別をこのように形式化することによって、ハイデガーの思考は両者の差異を支える本質を扱う必要がまったくなくなった。

したがって彼の哲学は、人間中心主義、あるいは人間主義^{ヒューマニズム}を全面的に拒否することができる」¹⁾ のであると言える。

さて、このような哲学史上の展開において、ひとつのやっかいな問題が浮上してくる。それは「動物」という問題である。それがやっかいなのは、そのような新たな、「関係の存在論」の形式のどこに「動物」を組み込むかが曖昧であるからである。「動物」はハイデガーの「存在論的差異」の形式のどこに位置づけられるのか。「存在者」と「現存在」の中間項としてか、あるいは「存在者」の側か、それともまた、この形式の外部にあるものとしてであろうか。しかし、この問題の難しさは、「動物」という主題を問題化するというその行為自体にも内在している。なぜなら「問題」化とは、主体が、指定されたある対象に向かい意識のベクトルを向け、そこに生じた距離を踏破するというきわめて「近代」主義的な認識論にふさわしい身ぶりであるのに、ここで主題とされる「動物」自体は、そうした意識の中心化の死角に入り、問題化しようとする主体意識を脱力させてしまうような性質の存在だからである。つまり、動物とは「他者」なのであるが、(いま触れたような、この「他者」を「存在論的差異」の形式のどこに位置づけるのか、あるいはそれが不可能なのかということの検討はさておき、) 近代の人間中心主義的認識論が崩壊への傾きを見せ始めるのに比例して「動物」という問題圏が浮上してくるのは当然なのである。なぜなら、「動物」は、近代の自然感からすれば、認識主体としての人間より下位にある「存在者」として遠ざけられていたのであるから、そのような人間主体の普遍妥当性が揺らぐという事態が「動物」という問題を引き寄せてしまうのは必然的経緯だったのである。

実際、19世紀末からの近現代ドイツ文学に限定しても、重要性の高いと思われる作家の作品にこの「動物」という主題を見いだすことができる。

1) 東浩紀『想像力と動物的回路—形式化のデリダの諸問題』『表象のディスクール①表象・構造と出来事』所収 東京大学出版会(2000年)63頁

しかも、それはただ「動物」が主題になっているということにとどまるのではなく、文体や技法や主題の処理の仕方は違っていても、そこには、上述したような、近代から現代への根本的な思想上の転換とどこかで通底するようなかたちでの、「書かれたもののある種の様相」に出会うということなのである。では、ここでなぜ「書かれたもののある種の様相」などというまわりくどい言い方をするのか。もちろん文学的エクリチュールと哲学的エクリチュールというような線引きをすることの愚は避けなければならない。しかし、「存在論的差異」のどこに「動物」を位置づけるかという問題を考えたとき、新しい概念や語源を意識した遊戯的な表現を使うときでも厳密な規定への志向性からは離れまいとするハイデガー哲学の画期的、独創的ではあってもどこか禁欲的なエクリチュールの伴う不自由が、「動物」という存在の位置を曖昧にしてしまう、いや、むしろ、意味規定が錯綜し隘路に入り、否定性が導入されるときもおそこから離脱することが抑制されているがゆえに、さらに曖昧にしまうということがあるように思われるのである。客体（対象）を問題化するという近代的認識論を脱－問題化するというをも問題化しなければならない対象への距離のとり方に対する哲学的エクリチュールの宿命のようなものと言えよいか、とにかくそこでは対象によって破綻をきたすことへの怖れの回避がかって対象を遠ざけてしまうという逆説があるのではないか。では、ニーチェの自由さにあってハイデガーにはない「動物」という対象からの大胆な遊離のごとく見えるものとはなんだろうか。それは、書くことが方向感を喪失したり、逸脱したりすることによって、結果的にエクリチュールそれ自体が、言わば「動物の存在の様態」に近づくような瞬間の不意の到来である。つまり、先程言った「書かれたもののある種の様相」とはまさにこの、人間の側で生起する「動物的存在の様態」のことだったのであり、それはまた「言語体系の支配を、エクリチュールの現在の身ぶりによって宙吊りにしてしまう」（フーコー）のである。だから、再度言っておくと、

ここで試みようとするのは、もちろん、文学的エクリチュールなるものの優位性を強調することでもなければ、「動物」を出しにしてハイデガー哲学に欠陥があると重箱の隅をつつくように指摘することでもない。そうではなくて、以下に扱う文学作品における「動物」という主題、およびエクリチュールにおける「動物的状态」を考える際に、ハイデガーのアプローチとの比較において動物論の所在がより明らかになると考えたからまでの話である。

2. 「存在論的差異」における「動物」の位置

—デリダによって読まれたハイデガー—

デリダはハイデガーの、(1)石は世界なし (*weltlos*) で存在する(2)動物は世界という点で貧しい (*weltarm*) (3)人間は、もし *weltbildend* をこう翻訳できるとすれば、*formateur de monde* (世界形成的) である—という三つのテーゼを踏まえて、(2)の動物が *weltarm* であることについて考察を加えている。デリダは、この「貧困」(*Armut*) は、精神という点で動物の精神は人間より少なく、また世界という点では動物は *weltlos* な石よりはいくぶんかの世界、いくぶんかの精神をもっているといった量的な「程度の差異」ではないと一旦は言っている。²⁾

2) Derrida, Jacques: *De l'esprit—Heidegger et la question*, Paris (Galilée), 1987. 邦訳: ジャック・デリダ『精神について—ハイデッガーと問い』港道隆訳 人文書院 1990年 76-77頁参照。なお、港道訳からの引用での〔 〕は訳者の補足、() はデリダ自身によるものである。

ハイデガーは次の箇所で「岩板」*Felsplatte* と「トカゲ」*Eidechse* の関係については、「物質的な物の存在様態」*Die Seinart eines materiellen Dinges* と「トカゲ、動物の存在様態」*die Seinart der Eidechse, der Tiere* という言い方で同様の区別を行なっている。Heidegger, Martin: *Gesamtausgabe hrsg. von Friedrich-Wilhelm von Herrmann*, Bd. 29/30, Frankfurt a.M. (Vittorio Klostermann), 1983, S. 291. なお、Heidegger のカタカナ表記については、港道訳、および東論文については引用のまま、拙論においては「ハイデガー」を採用した。

ハイデッガーは、ここでは奇妙なこの語、「貧困」を使い続けるなかでそれがどんな困難を引き起こそうとも、第一の仮定（程度の差異／引用者）をあっさり棄て去る。彼の語る貧困と富裕の差異は程度差をもっているのではない。とうのはまさに、本質の差異があるがゆえに、動物の世界は（略）人間世界の一つの種、あるいは一つの度合ではないからだ。³⁾（傍点引用者）

つまり、デリダは、ハイデッガーにおける「動物」は、「石」と「人間」の中間項として程度の差異の階層に収まるのではなく、むしろ質的な差異（「本質の差異」）の関係におかれていると認める。東浩紀はこの点について、「客体的存在者」と「現存在」を往還する「存在論的差異」の形式においては、「中間項は論理的に考えられようがな」く、「逆にそれでも〈動物〉の中間性を認めようとするならば、そのときハイデッガーはもはや、物と動物と人間の区別を程度の差異として説明するほかはない。そしてそれは言うまでもなく、形式性の消失、人間中心主義の回帰を意味する」⁴⁾としている。確かに、最終的結論はそうなのであろうが、デリダもここでは、（最終的には反転するための前提であるにせよ、）一旦はむしろ反対に、「程度の差異」ではないと言っているのであり、その論はもう少し迂回を経ているように思われるので、その経緯を補足的に検証する必要がある。デリダは3)の引用に続き、「貧困」に対し「欠乏」〔privation〕(Entbehrung)「欠如」〔manque〕と言い継ぎ、「本質の差異」を受けて、「動物は存在者に対してより少ない関係を、もっと制限された接近路をもっているのではなくして、別の関係をもっているのだ。」⁵⁾と言っている。そして世界をもっているかいないかという「所持－欠乏」の関係において、動物が世界を

3) 同書78頁

4) 東 前掲書 64頁

5) デリダ 前掲書 78頁

もっていないことと石がもっていないこととの違いについてのハイデガーの論をこう解説している。「動物は存在者への接近路をもっているがゆえに一つの世界をもちうる。けれども、そのものとしての存在者へ、その存在者の存在において接近路をもたぬがゆえに、動物は世界を奪われている。」⁶⁾ (傍点引用者) この「欠乏＝剥奪」(Entbehrung) は、動物は本来「本質の差異」、存在者に対する「別の関係」をもっているはずだから、『存在と時間』でハイデッガーが『として』の『何ものかとしての何ものか』の構造 (die Struktur des Etwas als Etwas) の内部に場所を定めている欠如態 (Privation) ではない。⁷⁾

ここで言われていることは、結局は言語の問題である。つまり、「そのものとして」「として」という形式で、言語による命名行為によって「世界理解 Weltverstehen」をもつ人間と言語をもたぬ動物の差異。しかしながら、「持ち得ることにおける持たぬことという形式としての『貧困』(あるいは欠乏) (Armut (Entbehren) als Nichthaben im Habenkönnen)」 「動物は一つの世界を持つておりかつ持つていない」 (傍点原著者)⁸⁾ というような矛盾した命題の回帰自体が「世界理解」において、「(欠乏) の反転として」言語の内にある人間中心主義の導入を許す契機となってしまう。後期ハイデガーは、「存在」Sein の一語を、「クロスさせた抹消記号」(kreuzweise Durchstreichung／要するに×印：引用者) の下を書くよう要請したが、「岩板」Felsplatte の上のトカゲ Eidechse の例について「岩板」という語を抹消すべきであると言った例⁹⁾ も、それが命名能力のない動物に対応した標示とすることで、そのような要請と共通の視座に支えられているように見える。しかしデリダは、その二つの例が同一視できないことを強調する。「動物にとっての欠乏＝剥奪 (Entbehrung) を、現存在

6) 同書 82頁

7) 同書 82頁

8) 同書 80頁 および Heidegger: A.a.O., S. 307.

9) Ebenda, S. 291f.

(Dasein) にとっての世界理解における欠如態＝剥奪 (Privation) からきちんと区別しなければならない。その一方では抹消を抹消する謎めいた交叉配列があるがゆえに、ここで問われている〔動物における〕Durchstreichung〔抹消〕は、『存在への問いへ』(Zur Seinsfrage 1955／引用者)において語「存在」に消印を押す抹消とは徹底して異なる意味をもっている。¹⁰⁾ ここにおいて、「人間」と「動物」の間に決定的な断絶があることがわかる(Entbehung と Privation の使い分けに注意しなければならない)。言語と意味の世界に住まう「人間」は、たとえその言語を抹消しようとも、まずは抹消すべき言語それ自体から生じる(「動物」に対する)過剰さから逃れられない。言語をもっているがゆえに生じる「欠如態」は、それをいかなる言語の否定作用のもとに表わそうとし、かつまた動物の「欠乏」に近接しても、両者が一致することはない。あるいは両者が一致したと錯覚することのうちに、必ずまた人間中心主義は回帰してくる。まさにここにおいて、本来、「動物の世界」には「本質の差異」があり、「動物は存在者に対して」「別の関係をもっている」はずであるのに、結果として、石と人間との中間項として動物が「程度の差異」の階層へと収まってしまふ曖昧さが、(しかも動物がその階層に属さないかのごとくに)生じるのである。

(……) 欠乏＝剥奪態の貧しさがなるほど一方で無生物と生物との、他方で動物と人間現存在との句切り、ないしは不均質性を標記するのだとしても、やはり、剥奪についてのこの言語のなかに残滓が読まれる否定性そのものは、ある一定の人間中心主義的な、さらには人間的な目的論(アントロポセントリック)エニスマストをいぜんとして避けることができない。そこにこそ、現存在から出発してなされる人間の人間性の規定が、なるほど変様させ、移動させ、ずれをもち込むことはできるが、破壊はできない図式があるのだ。¹¹⁾

10) デリダ 前掲書 86頁

東は「動物はハイデガーの思考の形式性を揺るがす。裏返して言えば、その形式性はもともと動物を排除して成立している」¹²⁾「その形式の純粋性そのものが世界を言葉によって覆われているとみなすことでのみ成立していたのだと考えることができる」¹³⁾ (傍点原著者) と、さらには、「実存論的分析論の欠陥は、それが言葉に覆われた世界を出発点としたことにあった。その前提ゆえにハイデガーの形式性はある地点で躓き、彼の思考は再び人間中心主義へ、さらにはナチ・イデオロギーへと陥った。最も形式的な仕事はまさにその形式性ゆえに最悪の政治的イデオロギーと手を結んだ逆説がここにはあり……」¹⁴⁾ (傍点原著者) と言っている。鮮やかな論の進め方ではあるが、この最後の引用箇所については、果たして、「形式性」における不徹底の躓きがナチ・イデオロギーに至ったのかどうか、その点のみをハイデガーのナチ加担問題へと拡大、援用できるのかどうかについてはなおいくつかの留保事項が浮かんでくる。では言葉に覆われていない世界をいかにして別のかたちで形式化しうるのか、脱イデオロギー化しうる形式性の徹底とはいかなるものか、依然我々は同種の問題圏を脱し切れずにいるのではないか、等々……デリダ自身、こうした「欠如態」としての否定性の言語に忍び込んで来る人間中心主義の回帰、言葉をもっていることからくる人間という現存在にとっての「破壊はできない図式」に対し、一例えば、ハイデガーの論法の罫をかわそうとする自らの論法がいつのまにかハイデガーの論法に似てきてしまうというようなことに対し、一過敏なほど自覚的であり、その避け難さに殊更に意識的であるように思われる。東は「今後の私たちの課題は、ハイデガーの陥穽、ひいてはそれを帰結した実存論的分析論の前提を回避したうえで、『人間』についての思考を別のかたちで形式化するためにはいかなる論理と分析装置を用いる

11) 同書 88頁

12) 東 前掲書 67頁

13) 同書 68頁

14) 同書 68-69頁

べきなのか、その戦略を練り上げることに付きると思われる」¹⁵⁾ (傍点原著者) と言うが、その課題の先にも、また新たな「陥穽」が待っていることは確実であり、もしかすると「いかなる論理も分析装置」もありえないのかもしれないのである。(東氏自身そのことを前提としてそう書いていると思われるけれども。)むしろ、ここでは、デリダ自身、こうした人間中心主義的目的論の回帰を回避することに対し、未だ決定的な戦略を見出しておらず、的確にハイデガーにおける動物の問題の核心と限界を指摘しつつも、最後にはハイデガーに対して批判を基調としつつも限定的に留保する言い回し、断定的言説一般を口にする事への躊躇の姿勢を垣間見せていることにこそ注目したい。そこに、デリダのこの問題を問題として対象化することの困難さに対する、あるいはもしかすると不可能性に対するリアルな自覚的意識を見るべきなのだと思う。

目的論のことを口にするとはいえ私は、進化論流に考えられたある進歩の概念を、諸々の存在者の階梯の上で動物生命を人間世界に向かって方向づけているような、ある長い階段という概念をハイデッガーに貸与しようというのではない。しかし、貧しさと剥奪という語は、避けようと望もうが望むまいが、ヒエラルキー化と価値評価を含むのである。表現「世界という点で貧しい」あるいは「無世界的」は、その表現を支える現象学と同じように、ある価値論^{アクシオロジー}を包み込んでいる。その価値論は、ある存在論に合わせてできているばかりでなく、存在-論〔理学〕的なものそのものの可能性に、すなわち存在論的差異に、存在者の存在への接近路に、次には抹消の抹消、すなわち世界の戯れへの、まずは weltbildend〔世界形成的な〕ものとしての人間の世界への開けに沿ってできている。ただしこの人間主義的目的論、私はそれを批判するつもりはない。たぶんもっと緊急なことは、ありとあらゆる否認^{デネガシオン}や回避にもか

15) 同書 69頁

かわらず、その目的論が今までのところ（ハイデッガーの時代から、そして彼の状況において、しかしそれは今日でもそっくり変わっていない）、生物学主義、人種主義、自然主義などを倫理－政治的に告発する際に支払わねばならぬ代価たり続けてきたということを想起させることである。私がこの「論理」を、諸々のアポリアや限界を、諸々の前提や公理上の決定を、諸々の逆転と汚染を、とりわけこの「論理」がそこで足をとられるのをわれわれが目撃している汚染を分析するのは、むしろこのプログラムがもっている恐るべきメカニズムの数々を、プログラムを構造化している数々の二重束縛を露わにし、次に形式化するためである。このプログラム、それは宿命なのだろうか？そこから逃れられるのか？「ハイデッガー派の」言説にも「反ハイデッガー派の」言説にも、そう思わせる兆候は全くない。このプログラムを変形させることはできるのか？私にはわからない。いずれにしろそれを、この上なく縫れた諸々の狡智と最も繊細なその手口の数々〔＝動力バネ (ressorts)〕に至るまで徹底して認めることなしに、一撃でそれを避けることはできない。¹⁶⁾（傍点は原著者、下線、破線は引用者による）

下線、破線を施した部分以外のところは、ハイデッガーにおける動物の問題の核心と限界に鋭く切り込んでいる。しかし、このデリダの論拠を、仮に親ハイデッガー的に、あるいは反ハイデッガー的に、どちらに立って利用しようとしても－あるいはさらにはそのどちらからも距離をとったとしてすら－、いつのまにか忍びこんでくる、目的論的な人間中心主義としての「破壊はできない図式」による言説の「汚染」があるのである（破線を引いた部分を参照。）デリダはこうしたあらゆる言説に同質の組成をもって入り込んでくる「プログラム」を恐れ、真っ正面から否定せず、むしろはぐらかしているように見える（下線を引いた部分参照。）それは、ハイデ

16) デリダ 前掲書 89-90頁

ガーをも引き込んだ「プログラム」の罫は、それを外部から対象化し、「一撃で避け」ようとしても、それがかえって「プログラム」の蘇生を促してしまう性質のものであるからで、となれば、残された道は、むしろ、「プログラム」の内側に潜行し、その「形式」を模倣し明らかにしつつ、脱臼させることしかありえないように思われる。

では、この「動物」という問題に関して、ハイデガーとデリダとの間に線を引くとする、何をその基準とすればよいのだろうか。それは、「動物」という「他者」を、「問題」として〔言語／非－言語〕の圏域に納めることを断念しうる資質とでも言えばよいだろうか。つまり、ハイデガーにおいては、非－言語（すなわち第1章101ページの用語を使えば「動物の存在の様態」）を、あらゆるタイプの否定性を駆使しても「言語」の、すなわち「人間」の「世界理解」の内部に置くことが断念されてはいないのである。ならば、人間中心主義を捨て去ること、つまり「動物」という「他者」と人間を「程度の差異」をともなう階層関係に置かず、両者を併存させること（あるいはさしあたり逆転させるという意味で「動物の優位性」を掲げてよい）は可能であろうか。「動物」を単に人間にとっての「他者」ではなく、認識が到達不可能な「絶対他者」として、あるいは視点の中心である自我ではなく、未知の他我を中心化させるようなかたちで、階層（言語による「形式」）の外部に置くことは可能であろうか。また、なおも言語の内部に「動物」が入り込んでくるとすれば、それはいかなる言語形態において現れてくるのであろうか。「動物」と「人間」の併存関係、あるいは「動物」を「絶対他者」としてその優位性に立つとすれば、むしろ、そこではその「他者」を直接的対象とすることの断念あるいは忘却が必要であろう。だが、その断念や忘却によってかえって自己の言語の蒙る変容が、逆に「動物という存在の様態」を思いもかけず逆照射してしまうということもありうるだろう。デリダのハイデガー論は「動物」を直接的問題として追いつめるのを最後に断念している。そしてそのことが想

起させるのが、文学作品における、また別の¹かたちで立ち現れてくる「動物」に関する、というよりは「動物的」エクリチュールの様々な断片なのである。以下、ここまでの論拠に絡めて、いくつかの例について検討してみることとする。

3.1. 近現代ドイツ文学における「動物」(1)

—リルケの『豹』 Der Panther—

ある文学作品が「動物」を主題にしているということではなく、書くことが、ある「動物という存在の様態」に近接してくるような場合がある。そこではやはり書き手の意識が言語から離脱するような瞬間が問題となるだろう。人間の日常においてそのような瞬間を求めれば、忘却、放心、疲労といった弛緩した状態（さらにはハイデガーに倣って「朦朧状態」 Benommenheit¹⁷⁾ か、あるいは速度をともなう運動状態などを考えることができる。しかし、文学においてそのような瞬間を探し求めるのは、言語に依りながら言語から離脱するのであるから、最初から自己矛盾を含むことになる。しかし、にもかかわらず、その言語の動きの中から、ある種の「動物という存在の様態」を類推させるような、間隙や空白が垣間見えることがある。問題はそれを、言語を前提にした非－言語として解釈不可能であることを提示するのではなく、言語と無縁な非－言語として一つまり、「非－」の否定性は、ある特定の言説に結びつくのではなく、言語それ自体に結びつく—、感知しうるものにできるかということにかかっている。それが、アポリアとなることは、前節でのデリダのハイデガー論の検討からも必至であるが、まずは「動物」を扱ったリルケの『新詩集』 Neue Gedichte (1907) の中の『豹』 Der Panther を取り上げてみたい。

17) Heidegger: A.a.O., 351ff.

DER PANTHER

IM JARDIN DES PLANTES, PARIS

Sein Blick ist vom Vorübergehen der Stäbe
so müd geworden, daß er nichts mehr hält.
Ihm ist, als ob es tausend Stäbe gäbe
und hinter tausend Stäben keine Welt.

Der weiche Gang geschmeidig starker Schritte,
der sich im allerkleinsten Kreise dreht,
ist wie ein Tanz von Kraft um eine Mitte,
in der betäubt ein großer Wille steht.

Nur manchmal schiebt der Vorhang der Pupille
sich lautlos auf-. Dann geht ein Bild hinein,
geht durch die Glieder angespannte Stille-
und hört im Herzen auf zu sein.¹⁸⁾

豹

パリ、ジャルダン・デ・プラントにて

通りすぎる鉄棒のためにその眼は
疲れはて、もう何ひとつ捉えられない。
まるで千もの鉄棒があり

18) Rilke, Rainer Maria: Sämtliche Werke hrsg. vom Rilke-Archiv, Bd.1, Frankfurt a.M. (Insel), 1955, S. 505. なお, Der Panther および Da neigt sich die Stunde... の二つの詩に関しては生野幸吉訳(岩波文庫『ドイツ名詩選』)を, Römische Fontäne に関しては富士川英郎訳(新潮文庫『リルケ詩集』)を使用した。

千の棒のうしろには世界は存在せぬかのようだ。

しなやかに強いその足の柔らかなあゆみは、
まことに小さな輪を描いて廻り、
ひとつの大きな意志がしびれてたたずむ
中心をめぐる力の舞踏のようだ。

ただ、ときおり瞳孔にかかった幕が
音もなくもちあがる一。すると何かの像がしのび入り、
四肢のはりつめた静けさのなかをゆきめぐり—
心臓にはいつてその存在をやめる。

「事物詩」Ding-Gedichte とよばれる、ロダンの影響下に結実した中期
リルケの造形性に富む作品群の中でも、代表作とされるものの一つである。
もう一編、『時禱詩集』Das Stundenbuch (1905) 第一部、『修道生活の書』
の冒頭詩を引用してから、再びこの詩に戻ってきたい。

Da neigt sich die Stunde und rührt mich an
mit klarem, metallenen Schlag:
mir zittern die Sinne. Ich fühle: ich kann-
und ich fasse den plastischen Tag.

Nichts war noch vollendet, eh ich es erschaut,
ein jedes Werden stand still.
Meine Blicke sind reif, und wie eine Braut
kommt jedem das Ding, das er will.

Nichts ist mir zu klein und ich lieb es trotzdem
und mal es auf Goldgrund und groß,
und halte es hoch, und ich weiß nicht wem
löst es die Seele los...¹⁹⁾

時は身をかたむけて、わたしにふれる、
あかるい金属のひびきをたてて。
感官はふるえる、わたしは自分の可能を感じ—
そして造形の昼をつかむ。

わたしが観^みるまでは、何ひとつ完成していなかった、
あらゆる生成がしずかに停まっていた。
いまこそわたしの眼差しは熟し、そのひとつひとつに
望む物がくる、花嫁のように。

わたしにとって小さすぎるものはなく、しかもわたしはそれらを愛し、
金地のうえに大きく描^{えが}く、
そしてたかだかとささげ、そうしてそれが
だれのたましいを解き放つかを知らない……

すでにこの詩に、いわゆるロダン体験を経て「事物詩」へと至る、様々のモチーフが胚胎している。また、この詩自体が、言わば詩論のような詩作することのメタファーになっていて、随所にそのキーワードが散らばっている。「わたしは感じる、わたしにはできると」Ich fühle: ich kann. という可能の感覚は「造形」Plastik と結びついたものであり（「わたしは造形の昼 den plastischen Tag をつかむ」）、また視覚性の優位に支えられて

19) Ebenda, S. 253.

いる。『マルテの手記』にあるような、人間の頽落、物化現象、物の自^{アウトノミー}律化への不安²⁰⁾に抗するには、まず「事物」Ding の一新された姿を表わさねばならないが、ここに「明るい金属のひびきをたてて」高らかに宣言されている、「わたし」が世界を観る第一者となることがまず、そのような現代の世界を通過する前の出発点にあったと考えることができる。「熟した眼差し」によって、「物」Ding を見るのではなく、「眼差しが熟す」Meine Blicke sind reif. と、「物」の方から「花嫁のごとく」「眼差しが望むように」とやってくると言われていることにも注意したい。つまり、20)の注で示したように、「視線」と「物」は夫婦のように不即不離の関係にあり、両者の頽落も同様の関係にあるといえるのである。そして、だからこそまた、そのように「事物」を「観る」ことが「完成」vollendet した瞬間には、「わたし」は「造形」の中に匿名的存在として埋没することになるのであろう。(「それがだれのたましいを解き放つかを知らない。」)

『豹』の詩は、この『時禱詩集』の「可能の感覚」の錬磨の彼方に、つ

- 20) 『マルテの手記』Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge の始めのところでもう、「僕は見ることを学ぶ。」Ich lerne sehen. と言われている。Rilke: SW. Bd. 6, S. 710. しかし、マルテはパリで死の諸相やいわゆる「実存的」不安を経験することになるのだが、「物」に関して次のような箇所がある。罐 Büchse とその蓋 Deckel の関係について空想を巡らすところだが、本来その二つは一体化しているはずだが、そうではなくなっている状況について、こう言われている。「人間との関わりが物に対し、どれほど混乱した作用をおよぼすが、ここで実にはっきりとするのだ。」そして、「物たち Dinge は、もう何世紀もこんなことを見てきたのだ。だから、物たちが自分の自然で静かな意義へのたしなみを喪失し、周りで人間たちが存在を利用し尽くしているように、自分もそうしたいと思って、墮落してしまうのも不思議ではない。物たちは自分の用途から逃げようと試み、億劫がり、怠惰になり、人間たちがやりたい放題にしている現場を押さえても、驚きもしないのだ。」Ebenda, S. 877f. ここでは、人間の物化現象が同時に物の墮落を招いていることと一体化している状況が描かれているが、「見ること」と「物」の緊密な相関関係を、その緊密さが失われたネガの関係から救いだし、「物」が本来もつ「自然で静かな意義」ihr natürlicher, stiller Zweck を回復させてやることで、ポジの関係を再獲得することが、詩作における課題であることが見てとれる。「罐」とその「蓋」についての件でも、「罐」や「蓋」の立場からの擬人化されたような奇妙な記述がなされていることにも、『豹』に関する本論の主旨との関係で留意しておきたい。

いには、見る者まで消失することの引き換えとして結晶化された、言語による彫塑物のようである。その意味では、動物を扱った詩でこれほど見事なものはめったにないだろうし、これはもう、動物に関する詩なのではなく、詩自体が動物と一体化していると言った方が正確であるとさえ思われる。動物園の檻の前に立つひとりの人間。その視線の先、檻の格子の向こうをせわしなく行き来する一頭の豹。その豹の内部ではどんなことが生起し消滅してゆくのか。人間が動物的状態に近づく瞬間が、言葉や時間感覚が希薄化してゆく現象を伴うのだとすると、この詩では、逆に、無時間で言葉のない完全な動物の存在の様態そのものを言葉によって造形するという離れ業がなされている。だからここには、詩人という人間と豹という動物がいるのではなくて、その観察者（詩人）は対象と一体となって自らを対象の内に消滅させてしまっていて、ただ動物の目に明滅する世界だけが存在していることになる。前章の用語を使えば、ここでは「人間」と「動物」の階層化も「程度の差異」を伴う人間中心主義も存在せず、「人間」と「動物」の境界は、「人間」の方がそれを跨ぐかたちで消滅してしまっているように思える。この点をもう少し考察してみよう。ここで、もう一編、『新詩集』の中の詩を取り上げる。

RÖMISCHE FONTÄNE

BORGHESE

Zwei Becken, eins das andere übersteigend
aus einem alten runden Marmorrand,
und aus dem oberen Wasser leis sich neigend
zum Wasser, welches unten wartend stand,

dem leise redenden entgegenschweigend

und heimlich, gleichsam in der hohlen Hand,
ihm Himmel hinter Grün und Dunkel zeigend
wie einen unbekannten Gegenstand;

sich selber ruhig in der schönen Schale
verbreitend ohne Heimweh, Kreis aus Kreis,
nur manchmal träumerisch und tropfenweis

sich niederlassend an den Moosbehängen
zum letzten Spiegel, der sein Becken leis
von unten lächeln macht mit Übergängen.²¹⁾

ローマの噴水

ボルゲーゼ

古びた丸い大理石の水盤のなかから
二つの皿が 一つは他の上に聳え
上の皿から水が静かに流れおちる
それを待ちうけている下の水は

静かにつぶやいている上の水に
黙って 言わば ^{てのひら} 掌 をまるめて ^{さかずき} 杯 にしたように
そっと緑の苔と暗い底に映っている青空を
未知のものであるかのように さし示す

そして静かに その美しい皿のなかで

21) Rilke: SW., Bd. 1, S. 529.

なんの郷愁もなく

幾重^{いくえ}にも波紋を描いて

ひろがりながら ただ 時おり

夢みてでもいるように 一滴^{ひとしずく}ずつ

垂れ下がっている苔^{つたわ}を伝ってしたり落ちる

移^{うつ}ろってゆくその皿の姿をそっと

下から微笑^{ほほえ}ませている最後の水鏡のうえに

リルケにおける「事物」Dinge は、ハイデガーで言えば「石」や「動物」のみならず、「存在者」一般というゆるやかな範疇^{カテゴリー}に収めることができるだろうが、ハイデガーの言う「石」とこの詩の「噴水」を同列に扱うことには無理があるだろう。というよりも、ハイデガーにおいては重要な両者の差異の定義はリルケの場合には（およびこの論には）、取り上げる必要がないし、扱ってもむしろ問題の所在がずれてしまう。「石」ははるかに無機質な、「存在者」に接近できない「世界をもたない」weltlos 物の例として措定されており、一方、「噴水」の方には、「人工物」「建造物」として、それなりに人間の技術なり創意なりに付随する有機的意味が賦与されているといった区別をしても、リルケの「事物詩」の場合あまり意味がないと思われる。「動物」との比較という点で言えば、「石」も「噴水」もさしあたり「無生物」という概念で括っても構わないだろうが、以下の論旨にとって、この両者の差異もさほど重要なポイントとはならないことも、確認しておきたい。

つまり、『豹』と『ローマの噴水』は、現実の事物に、視点をその内側からの風景の拡がりになで浸透させ、その事物を変容させることで、事物それ自体の自立性の言語による造形—それこそが「事物詩」であるが—を試みているという点で共通の世界の内にある。だが、にもかかわらず、よ

り「無生物」に近いはずの「噴水」の方に生気が宿っているように見え、「豹」の方が、あえてこういってよければ「石」に近く見えてしまうという逆説がここにはあり、要するに、共通の詩論的基盤に立ちながら、そこから突出して見える『豹』の詩のみを焦点化することがここでの課題だということなのである。おそらく『ローマの噴水』の場合は、未だ観察者の「感官」(Sinne: 19) の詩の第1節3行目参照)が「事物」への境界を跨がず手前に留まっているのである。だから、そこでは「事物」の自立的充足の表現の中にある比喩に、どうしても詩人の「感官」への対応関係が残り、それが翻って詩を読む者にも、人間の側^{がわ}でのある理想的な「象徴」的イメージを喚起してしまうからである。いわば、「動物」詩の『豹』の方が無機的であり、『噴水』の方がかえって擬人化された生き物※であるともいうような関係がそこにはある。[※ruhig, träumerisch, in der hohlen Hand, ohne Heimwehといった副詞(句), leis sich neigend, ...wartend stand, dem leise redenden entgegenschweigend, sich niederlassend といった現在分詞を使った語句、動詞 lächeln などに注意。]

『豹』においては、豹の内部に入り込んだ目は、もはや対象への距離を失い、豹に一体化した分だけ、表現はより即物的、つまり文字通り事物に即しており、名詞や副詞の選択にあたっても、そこには擬人化の余地は残らない。だから、第2節の3、4行目や第3節のような比喩を用いても、観察者の側に視点が残っていないため、それは即自的表現にとどまるのである。しかし、ここでは、詩人の言葉も視線も、豹の視線を得ることの代償に無時間的時空で凍結させられてしまっている。豹の運動の表現であるにもかかわらず、ここにあるのは詩人の感情の動きでないことはもちろん、また豹の運動でもないのではないだろうか。視るものと視られるものの境界を中央突破することで廃棄し、言葉を結晶化させることで、(計量可能という意味での日常的) 時間を超え、その結果生まれた一編の動物詩。それはまさにそうとしか思えないような精密さで動物の存在の様態を言葉

に刻印しているように見え、動物そのものとびったり一致しているようでありながら、しかしやはり虚^{フィクツイオン}構であり、その見事な離れ業は、成功すなわち「完成」した (vollendet: 19) の詩第2節1行目参照) 瞬間が実は失敗であり、本物に間違いないと見えるものが実は偽物であるといった危険さを孕んでいるのではないか。だからこの詩には動物の生のありようとは対極的な不毛な死の世界が二重写しになってくるのである。『ローマの噴水』より『豹』の方に「石」に近いものが感じられるといったのはそういう意味においてである。だから、この詩はこの時期の Rilke の絶頂に位置すると同時にその限界でもあり、後期 Rilke の苦闘を予感させるものでもある。

存在者への接近路をもたないようなハイデガーにおける「石」と、ここでの「噴水」は全く別種のものと考えなければならない。「石」はハイデガーでは「世界をもたない」weltlos 客体的存在者の域を出ることはないのに対し、Rilke の場合には、「存在論的差異」は構造や形式の問題ではなく、従来の意味での「主観」の拡張、肯定、あるいは「内的集中力」innere Intensität による「存在者」の問い直しを経て、最終的には「存在者」の内部での主観の解消（自己集中による脱自 Ekstase）というかたちで超克されるべきものであり、そういった志向性の線上に詩作があるからである。実際にはほとんどの詩において、その主観の解消や脱自は「完成」の一手手前でとどまるのに対し、『豹』は、その境界が踏み越えられた稀有の例であるように思える。したがって、ここでの問題はあくまで「動物」なのであり、『ローマの泉』は『豹』読解のための単なる補助線であると考えたのである²²⁾。(だからと言って、『ローマの泉』が『豹』より

22) 『豹』(1903年成立)と同じ、ジャルダン・デ・プラント(文字通りには植物園だが、動物園を併設)で成立(1907年)した詩として、『新詩集別巻』に Papageien-Park『鸚鵡園』(SW. Bd.1, S. 602.)と Die Framingos『フラミンゴ』(Ebenda, S. 629.)が見られる。本論の論旨に沿った視点に限定すれば、両詩ともに「動物」を扱っているが、方向性はむしろ『ローマの泉』に近く、したがってそのことから『豹』の詩の特異性が際立っている。

詩的完成度が劣るなどという話ではないのは当然のことである。)

先に、この詩は「動物の存在の様態」と寸分違わず合体しているように見えながら、そこにはどこか、本物に限りなく似通った虚^{フィクツイオン}構の域を出ないことの不毛さがつきまとうということを記した。そのことをもう少し検討してみる。『豹』では「動物は世界という点で貧しい」と言ったハイデガーの正反対の事態、つまり「動物」の優位による人間中心主義の消滅が達成されているかのように見える。デリダは引用10)で、動物にとっての「欠乏＝剥奪」(Entbehrung)と、^{ダーザイン}現存在にとっての「世界理解」(Weltverstehen)における「欠如態＝剥奪」(Privation)との区別の必要を促した後、「動物的抹消とは何に注意を促しているのか?」として、ハイデガーの論を次のように提示している。

抹消は、動物の朦朧 (Benommenheit) を想起させる。これについてハイデガーは忍耐強い記述を提出している。しかしその記述は、私には困惑していると思われる。この朦朧状態が、そのものとしての存在者への接近路を閉じているようだ。実は閉鎖しているのでさえない。閉じることが、ある開放性や開示性を、動物が接近路さえももたない Offenbarkeit〔開性〕を前提しているからだ。閉鎖という語までも抹消しなくてはならない。動物が存在者に閉じられている、ということはできないのである。動物は、存在者へと開かれていてそのことに閉じられているのだ。開放と閉鎖の間の差異に接近路をもっていないのである。²³⁾

「動物」が「存在者」に対し「開かれうる」offenbar か、「閉じている」verschlossen かということ、つまり「存在者」への関係可能性をもちうるか否かということ、そして言語をもたない「動物」の存在を言語をもつ側の「人間」が規定することをめぐって、ハイデガーは、「言語による対象

23) デリダ 前掲書86-87頁 および, Heidegger: A.a.O., S. 361f.

の厳密な規定への志向性」⇒「その対象の存在様態が喚起する感覚的類推によって生じる否定性」⇒「言語による指示の不可能性」⇒「冒頭」という循環する「隘路／迷路」へとあまりこんでいくとデリダはとらえる。「動物」が「存在論的差異」の形式からはみでてしまうので、「存在」の語に×記号をかぶせる（104頁参照）という、「現存在にとっての世界理解における欠如態＝剥奪」に厳密に符合するはずの語法が、「動物にとっての欠乏＝剥奪」に対しても有効であると思わせつつ、いつのまにかそこに誤差が生じていると言ってもよい。それは、結局ハイデガーが、「動物」を認識によって接近すべき客体として焦点をあてることを断念（放棄）しないことによるのではないか。つまり、対象が喚起する感覚的類推によって生じる否定性が言語それ自身に向けられたとしても、なおもその否定性自体も、依然客体へと焦点化されており、断念へと導かれることはないのである。ニーチェの女性論からの線上で、デリダが、ハイデガーの *Entfernen* 「遠ざかること」の語法に読みとったような、女性の真理としての「遠ざかり（距離）から遠ざかること」 *Entfernen von der Entfernthheit* にみられる²⁴⁾ ような、断念が自己の内に対象自体の様相を生起させるというような事態はここでは起こらない。

リルケの『豹』も、そのような意味での断念とは無縁であるし、否定性についても、言語の否定ではなく、観察者の存在自体が否定される（というよりは消滅させられる）のであり、その代替として獲得される言語による構築物はむしろ肯定されることになる。ハイデガーが結果的に動物を人間と石の中間項におくことになってしまうのとは違って、『豹』の詩の場合、豹という素材は、自己集中による脱自、自己の他者への転移を可能にさせる稀な契機を与えたように見える。それゆえに、「現存在にとって

24) Vgl. Derrida, Jacques: *Eperons—Les styles de Nietzsche*, Chicago (The University of Chicago Press), 1978, pp. 48-53. Heidegger, Martin: *Sein und Zeit*. Tübingen (Max Niemeyer) 1977, S. 105.

の世界理解における欠如態＝剥奪」という意識は、ここでは動物の「欠乏＝剥奪」を言語によって充滿させようという意志に包含されてしまうことになっている。しかし、前者が後者に包含されてしまうことが、まさしく、運動と見えるものが凍結させられた死であり、本物と見えるものが^{フィクツイオン}虚構であるといった、この詩が孕む危うさ、意図せざる反転を示唆しているように思う。つまり、言語によって充足へと完成されたはずの「欠乏＝剥奪」は、実は、かえって隠されていた「現存在にとっての世界理解における欠如態＝剥奪」を浮き彫りにしているのではないだろうか。

3.2. 近現代ドイツ文学における「動物」(2)

・ニーチェの場合―

では、断念によって、対象からの遠ざかりによって、人間と動物の境界領域において、「動物的様態」が現れてくるのは、どんな場合であろうか。本論の最後にニーチェの例を見ておくことにする。『反時代的考察』*Unzeitgemässe Betrachtungen*の第二部、『生にとっての歴史の利害について』*Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben*の本論の冒頭部分を引用する。

草を食べながら君のそばを通り過ぎていく家畜の群れを観察してみたまえ。かれらは昨日が何か、今日が何かを知らず、あたりを跳ね廻り、むさぼり食い、休み、消化し、また跳ね、そんなふうに朝から晩まで、来る日も来る日も、快不快とともにいわば瞬間という杭に繋がれていて、だから、憂鬱になったり倦怠を感じたりもしない。人間は辛い思いでこれを見る、なぜなら動物に対して、己れが人間であることを自慢気にしているが、しかし動物の幸福さに対しては嫉妬心をもって眺めているからである―というのも、人間はもっぱら幸福を望んでいるのだし、動物のように、倦怠も感じず苦痛もなく生きていきたいからだ、それなの

にその望みがむなしいのは、人間は動物と同じような幸福は望まないからである。ためしに一度人間が動物に尋ねたとする。「なぜ、君は自分の幸福のことを私に話してくれず、じっと私を見ているだけなのか？」動物もこれに答えて言おうとする。「それは自分の言おうとしたことを、いつでもすぐに忘れてしまうからだよ」——ところが動物はこう答えることももう忘れていて黙っていた。そこで、人間はこのことを訝しく思うことになる。

しかし人間は、忘れることを身につけられずに、いつでも過ぎ去ったことに拘泥してしまう自分自身のことも訝しく思ったのである。どんなに遠くへ、どんなに速く走っても、鎖もいっしょに走ってくる。不思議なことである、瞬間は急にそこにあるかと思うと、急に過ぎ去っていて、その前は無、その後も無、それなのになお幽霊のようにまた現れては後の瞬間の安らぎを邪魔してくる。たえず時間という巻紙から一枚の紙がはがれ、落ちたと思うとどこかへひらひら飛んでいく——それなのにまた突然ひらひらと舞い戻り、人間のふところに入ってくる。そこで人間は「思い出した」と言う、そして、動物がすぐに忘れ、どの瞬間もがまさしく死に、霧と夜の中に沈み、永遠に消え去るのを見ているのを妬ましく思う。このように動物は非歴史的に生きる。というのも動物は、ある数のように、おかしい端数を後に残すことなく、現在において割り切れているからで、うわべを装う術^{わざ}も知らず、何ひとつ隠さないし、どの瞬間にもあるがままの姿で現れる。すなわち動物は正直でしかありえないのである。これに反して人間は、過ぎ去ったものの大きな、そしてますます大きくなる重荷を支えており、この重荷が人間を押しつぶしたり歪めたりする。この重荷が目に見えない暗い負担となって人間の歩行に^{おもし}重石をかけてくる。もっとも人間は、この負担をうわべは一旦は否認することもできるし、同類との付き合いにおいては、お仲間の嫉妬を呼び覚まそうとして、とりわけ否認したがるものだが。それゆえに、草を食

べている家畜の群れや、あるいはもっと身近なところでは、まだ過ぎ去ったものを否認したことなどなく、過去と未来の垣根の間で至福の盲目状態のなかで遊び戯れている子供を見ると、あたかも失われた楽園を想い起こすがごとく、感動したりする。だがしかし、子供の遊戯にも邪魔が入らざるをえない。あまりにも早く、子供はその忘却状態から、呼び覚まされてしまうのである。そのとき子供は、「……であった」という言葉、人間に戦いや苦悩や倦怠が押し寄せてきて、つまるところ人間の^{ダーザイン}存 在とは何であるかを人間に思い出させる彼の^か合い言葉つまり、決して完了できない未完了過去形 (Imperfektum) を習い覚えるはめになるのだ。ようやく死が、待ち望んでいた忘れることをもたらしたとしても、その時同時に死は現在と^{ダーザイン}存 在をも横取りしてしまい、それによって、彼の^か認識—^{ダーザイン}存 在とは単なる途切れることのない「……であった」の連なりであり、自己自身を否定し食い尽くし、自己自身に矛盾することによって生きていくものにすぎないという認識に確認の印を捺するのである。²⁵⁾

当時のドイツで支配的であった歴史主義に対する批判の書を、いきなり（実は内的な連関があるのだが、一見ずれていて、無関係な）動物の話から始め、主題に相応しくシニカルな笑いを含ませて語るあたり、ニーチェの面目躍如といったところであるが、ここでは、その主題としての「動物」を、対象として語ることへのある断念がある。どういうことか。つまり、リルケの場合、「本物」と思っていたものが実は「^{フィクツイオン}虚 構」へと反転しかねない危険性があると言いたが、すなわち、リルケの『豹』の詩では、対象としての「動物」への境界線を踏み越えることの可能性を本気で追求

25) Nietzsche, Friedrich: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe hrsg. von Giorgio Colli und Mazzio Montinari, München (dtv/de Gruyter), 1999, Bd.1, S. 248f.

しており、そこで完成された言語造形物が「虚^{フィクツイオン}構」にすぎないという意識はないか、あったとしても、それが「(本)物」と等価の実体をもちうという姿勢において創造がなされているのである。また、ハイデガーの場合、視角の定点の位置設定を様々に変化させても、意識の狙う的に常に動物という対象があることに変わりはない。120ページで言ったように、対象(動物)が喚起する感覚的類推によって生じる否定性が言語それ自体に向けられたとしても、なおもその否定性自体も、依然客^{オブジェクト}体へと焦点化されており、断念へと導かれることはない。だから、ハイデガーの場合も、リルケとは違った意味で、動物の「存在様態」Seinsartの規定において、「虚^{フィクツイオン}構」化が生じることを何とかして回避していることになり、それによる論の錯綜が「世界理解」における「欠如」Privationと動物にとっての「欠乏」Entbehrungの曖昧化を招き、それがある価値をとまなう人間中心主義的目的論を呼び入れるというのが2章で検討したことであった。これに対し、ニーチェの場合は、「動物」に関して何らかの記述をすることが、厳密であろうとするほど結局は断念をせざるをえない部分があることを直感的に見抜いている。したがって、その記述は「虚^{フィクツイオン}構」は「虚^{フィクツイオン}構」にしか過ぎないという前提で書かれている。だから、ここで言われている意味内容も、リルケやハイデガーの場合同様、動物の「存在様態」に迫ろうとしてはいるが、にもかかわらず、さらにそれを、直接的^{シニフィエ}な所記ではなく、言説を最初から「虚構」化し、次にそれを否定するときに生じる間隙の担う能^{シニフィアン}記として賦与しようとしているのである。

最初の段落の後半、人間と動物の問いと答の箇所をとりあげてみる。まず、人間から動物に対し、「なぜ、君は自分の幸福のことを私に話してくれず、じっと私を見ているだけなのか？」という問いがおかれるが、この問いの前提としては、「ためしに一度 wohl einmal 人間が動物に尋ねたとする」という「虚構」が設定されている。この「虚構」は、動物が答える(「それは、自分の言おうとしたことを、いつでもすぐに忘れてしまうから

だよ)」という、あからさまな擬人化として、さらに徹底したかたちで受け継がれる。しかし、ハイフンの後の文、「ところが動物はこう答えることももう忘れていて黙っていた」(...da vergaß es aber auch schon diese Antwort und schwieg...) が、その前文の動物の用意した答が「虚構」(一人芝居的な演戯)であることをすかさず意識化させて暴き、反転させてしまう。(vergaß, schwieg といった絶妙な過去形でのずらしがその「虚構」化を裏返す作用を強めていることにも注意したい。) しかもそのことで前文の動物の答の意味内容を否定しないどころかむしろ実現しているのである。そして、この一節のキーワードである動物の「忘却すること」 Vergessen もこの時制の操作によって言外の意味(つまり「^{シニフィアン}間隙の担う能記」)として獲得している。だから、否定性は、ここでは客^{オブジェクト}体へと焦点化されているのではなく、むしろ、^{シニフィアン}能記—^{シニフィエ}所記の記号形式からの退却、逸脱による、その意味の言外の^{シニフィアン}能記への反転となっている。そのとき、「動物」はもはや、客^{オブジェクト}体ではなく、客体化することにより生ずる「距離」からの遠ざかり Entfernen von der Entferntheit によって、今度は書き手の言語のうちに生起する、何ものかということになる。

では、人間と動物との境界線はどうだろうか。ハイデガーの場合は、語を「抹消する」 durchstreichen ことの否定性を含めてもなお、「動物」は「人間」の言語操作の枠内に引かれるべき境界線の向こう側に位置するものであることをやめてはいない。「[抹消記号が] 書かれようが全く書かれまいが、(というのもハイデガーは抹消することによって、自分が抹消するものを読ますがままにしておき、またここでは抹消『すべきであろう』と言う²⁶⁾。しかし、彼は抹消してはいない。まるで抹消を抹消するかのよ

26) 9)の「トカゲ」と「岩板」の関係についての論考。ハイデガーの原文の該当箇所を示しておく。“Wenn wir sagen, die Eidechse liegt auf der Felsplatte, so müssten wir das Wort ›Felsplatte‹ durchstreichen, um anzudeuten, daß das, woauf sie liegt, ihr zwar *irgendwie* gegeben, gleichwohl nicht als Felsplatte bekannt ist.” Heidegger: A.a.O. (Anm. 2)) S. 291. (イタリック体は原著者、下線は引用者による。)

うに、避けるのを避け、避けずに避けているかのようにだ)、万事は、そのものとしての存在者への接近路を欠いている動物にとって、そのものとしての存在者が、存在者の存在があらかじめ抹消されており、しかも絶対的な抹消、欠乏＝剥奪による抹消によって消されているかのごとくに進行する。』²⁷⁾ (この少し後に引用10)が続く。) ここで、デリダは、実は人間の言語操作の枠内にあるものが、動物の「欠乏＝剥奪」に一致しているかのように事態が進行することを言っており、とすれば、抹消によって、言語にとって不可知の境界線の向こう側へと区別されたはずの動物の存在様態も、やはり言語に汚染されている一つまりは、依然として「世界理解」の「欠如」と、動物の「欠乏」が区別されず、曖昧なままに残る一ことになる。

ニーチェの場合は、最初から動物の「欠乏＝剥奪」は言語にとって不可知なものとなっている。だから、動物は擬人化というような虚構によって表現される、徹底して人間の、言語の枠内での位置を占めており、そこには境界線は存在していないかのように見える。しかし、「虚構」を「虚構」として提示するが、その反人間的、非言語的「意味内容」(「所 記」)^{シニフィエ}はその「虚構」性を否定されることで、翻って、「人間」(「世界理解」「言語」)に対する「非-」の否定作用そのものへと反転する。要するに、不可知なものとして言語の枠内で「虚構」化されたに過ぎない「動物」が、言わば濾過装置のようなものとして、意味の変容を受け、言語および「世界理解」Weltverstehen に対し異化作用として働く外部の力として生起するのであり、そのとき、「動物」はもはや「対象」,「客体」,「問題」のいずれでもなく、したがって「欠如」Privation を投影すべき「欠乏」Entbehrungではなく、「欠如」に併存するある「充溢」(強度)となる。そのとき対象としての動物は忘却されることで距離の彼方に遠ざかり、同時にその動物の特性である、瞬間 Augenblick とともに生き同時に死に、それゆえその

27) デリダ 前掲書85-86頁

表徴として「忘却する」*vergessen* ことをともなう作用運動が人間の側に生じてくるのである²⁸⁾。(だから「忘却」はこの場合、動物の存在様態の核心であると同時に、「動物」という問題、対象を「忘却」することへと反転される。) ニーチェにおいては、それゆえ、人間と動物との境界線は言語の中のどこかに引かれるのではなく、言語(という制度)と非-言語の間に引かれている。つまり、対象化の断念が、「動物」を言語内(すなわち階層に内属する)「他者」ではなく、帰属不可能な内的生起へと反転させ、言語にとっての「絶対他者」(外部)として、「欠如」(内部)と併存する対応関係において把持しているのである。人間の側^{がわ}の「欠如」は、むしろ、言語という動物に対する「過剰」なものが同時に生じさせる無根拠性^{むこん}に対応しているが、ニーチェの場合は、その無根拠を動物の「欠乏」へと志向性をもって重ねようとするのではなく、その「欠如」を、(それこそ動物性から引き込んできた)盲目的な生の力の中心とすることで、人間中心主義的な価値の反転、相対化の虚点へと変容させることが眼目になっていると言える。

『悦ばしき知識』*Die fröhliche Wissenschaft* の中の別のアフォリズムにもそのことがよく表れている。

動物の批評—私は懸念する、動物たちは人間を彼らの同類の存在として、健全なる動物の理性 *Thierverstand* を失ってしまったことに危険な同類の存在として見ているのではないかと—気違いじみた動物として、

28) 引用25)第二段落の、子供についての話の部分の、「もっと身近なところでは」の原文は、in vertrauterer Nähe「より馴れ親しんだ近さでは」である。この語の選択がかえって距離の彼方におかれた動物の到達不能な不可知性とそれゆえにそれを距離なしの中心において獲得するというニーチェの問題の在処(ありか)を示唆している。無時間的な忘却状態からの覚醒と時間意識が生じることが、言語の習得と同時であることも、「そのとき子供は『…であった』という言葉を理解するようになる」Dann lernt es das Wort »es war« zu verstehen... という巧みな比喩で言われている。動物論では時間の問題も重要であるが、本論では扱わない。

笑う動物として、泣く動物として、不幸な動物として。²⁹⁾

ここでも、動物のしている *betrachten* その視線は、擬人化された虚構のものであり、『豹』で境界線の踏み越えによる視線の反転が目論まれているのだとすれば、むしろ境界線上で動物に背を向けて人間世界の方を向いているのであるが、にもかかわらず、「彼ら（動物）の「同類の存在」*ein Wesen Ihresgleichen* であるからには、何らかの動物性をその人間世界の差異化のために動物から借用しているのである。そこには、境界を踏み越えて動物という他者の視線を獲得したかに見えるリルケの場合よりも、かえって境界領域であるが故の動物状態のリアリティが感じられる。さらにはまた、ニーチェが最後には狂気へと至ったことも、リルケの方が人間を消去することを言語への完全な委託によって成し遂げたのだとすれば、逆に人間の姿（外見）を維持したまま内面は動物への境界を踏み越えた一すなわち人間としての条件を維持する限り距離の彼方にあるものを距離ゼロの中心へと反転させ、かつ言語から非－言語へと離脱した一のだと考えることもできるだろう。

以上で、ひとまず「動物」という問題についての考察を終えることにするが、ニーチェ同様、動物を、対象化される他者ではなく、境界での世界理解、言語と非言語の交叉する領域での内的生起の問題として、さらに徹底したエクリチュール体験として生きたドイツ語圏での作家となればカフカをあげないわけにはいかない³⁰⁾。これに続く論考はカフカに向けられる

29) Nietzsche: A.a.O., Bd.3, S. 510.

30) ニーチェが狂気に至ったことに対し、ここで、「人間の姿（外見）を維持したまま、内面は動物へと踏み越えた」という言葉を使った。もちろん動物＝狂人ではないし、狂人がいきなり言語のない世界に入るわけでもないだろう。しかし、世界（理解）という場、言語という制度内に住まう人間（現存在）がその前提を奪われ、境界線を踏み越えたという見方はとりあえずは妥当であろう。※（後注）この「踏み越え」を「変身」と言い換えると、なにやら、カフカの世界を想起させるが、その意味では、カフカの『変身』*Die Verwandlung* の場合はニーチェの狂気とは逆で、外見は境界線を踏み越え、

ことを予告して本論を終えることにしたい。

《付記》

本論は平成12年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。

内面は境界線の手前に留まるということになろうか。もう一点、リルケの『豹』には、どうしてもカフカの『断食芸人』Der Hungerkünstler^{エビローグ}の最終場面を連想させるところがあることも指摘しておきたい。断食芸人が死んだ後の檻には、新たに若い豹 ein junger Panther が入ってくるのである。この作品の成立年(1922) から言って、カフカが『豹』を読んでいたこともありうるが、反対に『豹』をリルケ版『変身』とよぶこともできるだろう。「断食芸人」が死んで「豹」に変身したという解釈は可能であるが、表向きの類似性はあるものの、当然のことながら、主眼はリルケとはかなり違うところにある。これについての考察も、次の課題としておく。〔※むしろ、言語というある「過剰」を抱え込んだ人間の方を「錯乱の犬」(カニス・デメンス)と見る、引用29)と共通する視座も、同時に維持しておかなければならない。『文化記号学の可能性』(丸山圭三郎他 日本放送出版協会 1983年) 62-65頁参照。〕